

2002年 第3回 学生のための
プロデザイン講座レポート

教育研究部会 (関東)

■日 時：7月19日(金)
■場 所：宝仙学園短期大学

TDA教育研究部会が主催している「学生のためのプロデザイン講座」の第3回講座が、7月19日(金曜日)、宝仙学園短期大学、階段教室で行われました。今回は凸版印刷株式会社で壁紙等の建装材のデザインをされている梅崎健さんをむかえ、〈建装と表層／サーフェスデザイン〉について語っていただきました。その模様をレポートします。

まず、梅崎さんのプロフィールですが、1972年に武蔵野美術大学の工芸工業デザイン学科に入学され、3年次からはテキスタイル科を専攻、その後大学院へと進学され、卒業制作では壁装材のデザインというテーマで作品を制作されたということですので、つまり、学生時代から建装業界のリーディングカンパニーである凸版印刷に就職されるべく運命にあったかのような方です。そして現在では、凸版印刷の建装事業部企画部の部長をされています。

(梅崎さんの学生時代の事や仕事の事についての寄稿文が武蔵野美術大学テキスタイルデザイン科のホームページ上、卒業生の項にありますので、一度御覧下さい。URLは<http://www.musabi.ac.jp/koude/m-textile/top.htm>です。)

ところで講義の内容ですが、梅崎さんのサーフェスデザインに対する考え方から、その実例までをスライドを上映しながら分かりやすく講演されていました。その主な内容は次の通りです。

最初にサーフェスデザインとは一体何か、ということについて、次の3点をあげて説明されていました。

- 1) サーフェスデザインの基本要素は「カラー／マテリアル／パターン」の3つである。
- 2) サーフェスデザインの領域とは、プロダクトデザインから都市の計画、つまり地表のデザインまでとてつもなく幅広い。
- 3) そのことはサーフェスデザインというものが人間の生活のあらゆる領域に浸透していることを指す。

そして、サーフェスデザインの訴求要素として、

- 1) マッチング；サーフェスデザインされるものとそのサーフェスデザインがコンセプト、イメージ、用途、機能等の面で、整合性があるかどうか。
- 2) ミキシング；商品は単体よりも複合的に使われるケースが多く、使用目的、組み合わせ等を考慮しているかどうか。
- 3) ディスタンス；その商品が使用される場所にあった距離感、スケール感でデザインされているかどうか。

の3つがあると実例を交えて説明されていました。しかし、これらの梅崎さんの話はテキスタイルデザインもサーフェスデザインの一部であるにとらえるならば、我々テキスタイルデザイナーにとってもとても重要なことで、改めてデザインの本質と



言うものを認識させられる話でした。その後、スライドはサーフェスデザインウォッチングと題して、2つのグループに分けて上映されました。一つは建築、インテリアにおけるサーフェスデザインと言う切り口で、美しい日本の伝統的な家屋、そして、ヨーロッパやアメリカ等、海外の建物の景色や当然、壁装等を映した写真、そしてもう一つは毎年、世界中から20万人が訪れるミラノ国際家具展の模様を映したものでした。そのいずれの映像も光りと陰影の織り成すテクスチャーや色がとても美しく、ただ観ているだけでも様々なインスピレーションを私たちに与えるものでした。

最後に梅崎さんの話の中で印象に残った話を一つ紹介します。それは長年、サーフェスデザインの仕事をしていると、ついそこらの建装材を知らず知らずのうちに触ってしまっているそうです。しかも、時として自分の視覚と実際の触感が異なる時があるそうで、そんな時、著しく期待を裏切られた気持ちになってしまうのだそうです。梅崎さんはそんな御自身の症状を「サーフェスデザイン症候群」と言う言葉で表現されていました。なんとも切ない話ですが、そう言えば、時としてテキスタイルの世界にもそのようなことがよくあります。私もこの布地は一体どんな質感だろうと触ってみたら、何とツルツルの転写プリントだった、ということがしばしばあります。繊維業界に入って15年、私もいつの間にか「テキスタイルデザイン症候群」を患ってしまったのかも知れません。(レポート 中島 良弘)

